

第5章 思い出

工技センター10周年記念を祝して



元工業技術センター所長
竹 盛 欣 男

鹿児島県工業技術センターが本県の工業技術の中核的存在として着々その機能を発揮され、10周年記念の年を迎えられたことは誠に目出度く、心からお祝い申し上げます。

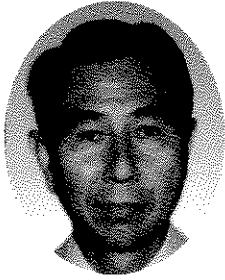
工業技術センターでお世話になったのは昭和62年12月から8ヶ月の短い期間でありましたが、準備段階の頃を考えると、かなり長く工技センターの仕事に携わっていたように思います。幸い本庁の方々の温かいご指導と3試験場の皆さんの理解とご協力のお陰で無事新庁舎の建設と移転を完了して誠に嬉しかったことが、10年経った今でも昨日のように思い出されます。センター建設時の実施設計の段階では、間取りや装置の配置をどうするか等々、プロジェクト研究の多忙な中で侃々諤々の議論をされていたことを思い出します。また、移転の前後は事務方が多忙を極め、特に、3所の合併統合が同時に行われたこともあって、移転後の庶務部の忙しさは大変で毎日夜遅くまで頑張っていたいただき、その間事務方を取り仕切って頂いた当時の原口庶務部長には大変ご苦勞をおかけしました。工技センター開所披露の落成式は最も緊張した行事でしたが、私自身は来客の対応に追われ、式典のセッティングと進行は大迫副所長と原口庶務部長にすっかりお世話になりました。両氏の好采配のもと無事終了し、モニュメント“メビウス88”の除幕と同時に華やかに打ち上げられた花火が式典の見事なフィナーレとなった光景を今でも思い出します。

原口さんはこの10周年を目前にして亡くなられ、誠に残念に思います。本稿をお借りして心からご冥福をお祈りいたしますとともに、工技センター設立と開所当時の運営に尽力されたご功績に対して衷心より敬意を捧げたいと存じます。

この10年の間、世相の変遷とともに工業の分野にもいろいろなインパクトが加わり、種々の困難を克服しつつ21世紀への道を模索していかねばならない状況にあると思われまます。5周年記念誌に記された「工技センター中・長期研究フロー」によると、県内工業の種々の分野で、産学官協力のもとに各研究部の力を結集して各種の研究開発を実施されており、また企画情報部を設置して技術情報発信機能の充実を図られるなど、県内中小企業の「技術の拠りどころ」としての体勢が整ってくるのを拝見して誠に嬉しく存じます。

職員各位の一層のご活躍と工技センターの益々のご発展を心から祈念申し上げます。

思 い 出



佐賀県工業技術センター総務部特許情報室
(株)久留米リサーチパーク 研究開発部 技術顧問
今 川 耕 治

鹿児島県工業技術センターの設立10周年を心からお祝い申し上げます。

思えば早いもので、竹盛初代所長からまだ創生期といえる設立9ヶ月目の工技センターを、二代目所長として引継いだ昭和63年8月1日から既に9年余、その後3年2ヶ月の在職期間からも6年が経過しようとしています。

そしてこの6年の間に、さらに九工研のスタッフ陣から3人の所長が続き、それぞれの期待にこたえ、役割を果たしてこられていますので、工技センターと九工研との結びつきがますます密接なものになっており、私にとっても喜ばしいことです。

私の赴任時には、既に竹盛初代所長、大迫副所長をはじめ関係者の大変なご苦勞のもとに工技センターの土台・組織はしっかりと築き上げられており、私はセンターの運営に集中することができました。その運営に対する竹盛所長からのアドバイスは「センター職員の融和と一体感の醸成」だったと覚えます。

その一体感醸成の手だてとして、「メビウスの輪」をデザインした工技センター旗の制定、さらに各年度の研究報告書の発刊、年一度の研究発表会の開催が相次いで設定・実行され、また既に佳境に入っていた大型プロジェクト「焼酎廃液の総合利用」の研究管理や「シラス系新規プロジェクト」の立案、あるいは異業種交流プラザの募集と運営等々に各部室共同で取り組むものも多く、新設間もない企画情報室の堀切室長をはじめとする当時の担当職員の苦勞も大変なものでした。

在任中の大きな出来事といえば、昭和天皇の御崩御と昭和から平成への時代転換、バブル景気の急成長と終焉、消費税導入と参院選の保革逆転などが印象深く、政治経済的には今でもこの流れの中にあると思われます。

また、県内的には(株)鹿児島頭脳センター、(社)鹿児島県工業倶楽部がそれぞれ設立され、今給黎さんの女性初のヨットによる太平洋単独往復横断の快挙もこの時期でした。

思い出せばきりがなく、懐かしさも募りますが、最後に職員の皆様に期待を込めて以下に申し添えたいと思います。現在は、各地の公設研究機関（もちろん国研といえども同じですが）が技術の拠りどころとしてのその存在意義を厳しく問われる時代です。この10周年を機に一段とレベルアップを心がけていただき、県内企業の絶大な支援を持つ工技センターとしてますますその存在を高めていただくことを切に望みます。そのことで前身の工業試験場設立から75周年の節目も迎えるこの時期が真に有意義なものになると思います。

各位のご健闘を切に祈ります。

鹿児島思い出



工業技術院九州工業技術研究所
所長 陣内和彦

この度は記念すべきセンター創立10周年を迎えられ、心よりお祝詞申し上げます。

思い出とは一度忘れたことを再び思い出すものであるならば、私の鹿児島は未だその部類には入らない。それは忘れることなく鮮明な記憶として現在に連なっているからです。

私のセンター在職は平成3年10月から同6年5月までの2年8ヶ月間でしたが、その間いろいろと貴重な体験をし、同時に敬愛すべき多数の知人や友人を得ることができました。これらは私の財産として、その後の人生の重要な糧となっています。ここに、折り折りに会い、共に時を過ごすことが出来た方々に対して心より感謝申し上げます。

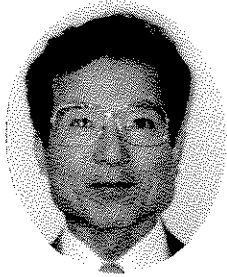
鹿児島の話で真っ先に思い出すのは平成5年夏の集中豪雨による土砂崩れ災害です。当日は生涯学習県民大学の終了式の日でしたが、出席者には式の半ばで早々に引上げて貰いました。そして、竜ヶ水駅の大崩落の発生がセンター職員の帰宅時間に近かったので、もしやと思い大変心配しました。10号線だけでなく隼人から鹿児島方面へ通じるほとんどの道路が遮断され、センター泊も十数人。外からは一人また一人と所在と状況報告の電話が入る。ほとんどの人が帰宅できずに難渋して、役場の駐車場やカプセルホテル、あるいは寿司屋の二階などに避難。最後に、加治木港から船に乗って帰宅した浦口さんからの知らせを受けて、センター職員全員の無事が確認されたのは朝5時であった・・・。

研究に関連して印象深く思い出すのは、センター研究者を鹿児島大学のDrコースへ入学させる制度を導入する時のことです。最初は、本庁担当者から「学位を取るのは個人の名誉のため、そんなに暇ならセンターは人が余っているのですネ」などと言われながら、必要性を関係者全員に対して粘り強く説得しました。そしてようやく最後に、羽山部長（当時）の裁断で「OK」となった次第。高度な研究が求められる時代、本当に良かったと思います。学位取得を一つのバネに、意欲を持って研究に励んで頂きたいものです。また、人材確保に関連して、研究職中途採用者の年齢制限が現行の27歳はおかしい。ストレートでDrコースを修了するのが27歳です。Uターン者などの経験豊かな優秀な研究人材を採用するには、35歳か、出来れば年齢制限なしが望ましい。再検討願いたいものです。

個々の研究については、紙面の都合で省略しますが、新聞などでその後の研究成果が着実に実を結んでいることを知り、大変嬉しく思っています。一層頑張ってください。

10歳になったセンターが今後益々発展・成長することを切に祈念して筆を置きます。

世界を視野に，時代を創る気概を持って



工業技術院九州工業技術研究所
ファイン素材部長 原 尚 道

工業技術センター発足十周年おめでとうございます。

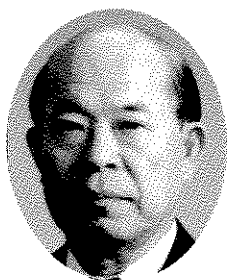
私は1994年6月に着任しましたので、仕事は清子内親王殿下お成りへの準備から始まりました。所長は説明役といわれて、研究部の協力を得てシナリオを作りリハーサルを繰り返しました。当日7月25日は、発酵技術、シラス利用、竹平板、コンピュータ・グラフィックスによるデザイン、草木染めを紹介しました。殿下はいずれの研究成果にも深い関心を示され、センターにお迎えできて本当によかったと皆様とともに喜んだことを昨日のこのように覚えております。その夕べが恒例の暑気払い、野外ステージに様変わりした中庭で、バンド演奏付きで飲んだビールのおいしかったこと！まさに至福のひとつときでした。

翌1995年11月には「科学技術基本法」が公布されました。追っかけて「科学技術基本計画」が、また「地域における科学技術活動の活性化に関する基本指針」も公布されて、日本は「科学技術創造立国」を目指すという明確な方向づけがなされました。それを追い風に、工業技術センターでも21世紀を目指す新しい仕組みを創る試みを始めました。センター発足以来の7部2室制を9部制に拡充し、工業技術センターは、①研究開発を基盤とする「技術的拠りどころ」、②開かれた工業技術センター、③交流・連携・情報発信の拠点、④未来を支える頭脳づくりを目指すという指針をつくり、また重点研究開発分野を①地域資源の高度利用、②新素材・新材料開発、③バイオ・食品開発、④生産・加工・システム技術、⑤人間・環境・デザイン技術、⑥電子・情報技術の6分野に拡充しました。施設面ではスーパー・テクノゾーン構想が浮上し、産学官連携による研究開発の場「システム技術開発センター」が実現、また大型プロジェクトの立ち上げ等、これでタイミングよくセンター発足十周年を迎えられると喜んだものです。

1996年は公費不正支出が問題になりました。県民のために何をなすべきか、何をなすべきではないか、過去の慣例の延長上で物事を処してきた甘さが裁かれ、公僕としての原点に立ち帰ることをきびしく要求される時代になったと痛感させられました。

在任期間2年半、いろいろなことがありましたが、皆様に伝えたいことは努めて鹿工技ニュースに書くようにしました。読み返してみますと、私の着任あいさつは「県産技術のグローバル化を目指して」、退任あいさつは「科学技術創造立国に呼応して」という題になっております。その方向に、世界を視野に時代を創る気概を持って、工業技術センターが大きく飛躍発展しますよう心から祈念いたします。

10周年の節目に期待すること



(社)鹿児島県工業倶楽部

事務局長 大迫陽一

早いもので、工業技術センターが設立されてから今年の12月で10周年を迎えるとか、先ずもってお目出度うございます。基本計画策定から、建設、立ち上げ時のセンター運営まで参加させていただいたことが、昨日のこのように思い出されます。

新設工業技術センターについては、当時の鎌田知事の思い入れが強く、テクノポリスの中核施設という位置づけはもちろんのこと、島津斉彬公の「尚古集成館」に匹敵する“昭和の集成館”たらしめる意気込みがありました。そのため、建物にしても壁材として溶結凝灰岩（花棚石）を使い、中庭のショールームからの見通しは、磯別邸の見通しを模し、裏庭の孟宗竹林は、実験棟の奥に配したいきさつがあります。

センター設立前後のことが懐かしく思い出されますが、ここでは現在の私の立場で、受益者側からの工業技術センターへの期待と希望を述べさせて頂き、お祝いの言葉に代えさせて頂きます。

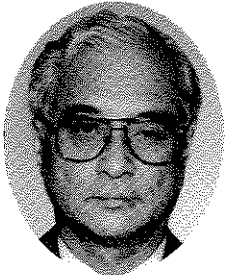
さて、公設試験研究機関も時代とともに、その位置づけ、役割が変わってきたことは、賢明な職員の皆さんは認識されていると思います。そして現在、大きな転換期に入っていることも・・・。産業界としては、少なくともこれまでは、従来どおりの方法で従来どおりの物を作っておれば、企業として成り立ち、事業を継続することができました。

しかしながら、“物”の需給関係がグローバル化し、安価な商品が世界のいたるところから有り余る位に入ってくるようになると、“物づくり”にも何らかの特徴を持たせなければ立ち行かない時代（オンリーワンの品物、どこよりも安い、技術がまねできないなど）。そして、多くの企業が特徴ある自立型技術は認めていても、自らの力で確立することは困難であることから試験研究機関との結びつきが必要不可欠の時代に立ち至っているわけです。そうは言っても、企業側の大学や国公立試に対する一般的な見方には、まだまだ大きな距離を感じている状況にあります。

その第一の理由は、中小企業にとって生産が第一で研究開発部門に専従させる人材の配置が困難であること、第2は、試験研究機関で研究しているテーマは、短時間で商品化に結びつきにくいと受け止めていること、第3は、中小企業のオーナーにとって研究者との交流が難しくわずらわしいと感じていること、第4は、開発前に、今から取り組もうとしている製品が商品として世に出した場合売れるものかどうかの迷いがあること、などです。この4番目が最も大きいと思われませんが、このことさえ自信が持てれば、人材の配置も、経費も、開発時間の長さも克服できると思われれます。

これらのことは、企業側の努力に待つところが多いわけですが、研究機関側からの踏み込みの深まりによっては、解決できる部分も多いと思いますので、もっと職員の皆さんも外に出て、中小企業の抱えている課題を親身になって聞いて欲しいと思っています。

思い出に寄せて



(財)日本テクノマート
鹿児島県知的所有権センター
特許流通アドバイザー 山田 式典

昭和61年12月1日、新装なった工業技術センターで、当時の知事、鎌田要氏から直接、辞令交付を受けたことが、つい昨日か一昨日の出来事のように思い出され、今年で丁度10周年を迎える事を聞くにつれ時の流れの速さに感無量の想いであります。

鹿児島市内の工業系試験研究機関が統廃合されてテクノポリス圏域の中核的な試験研究機関として新設されるという構想が出されたことに対して、職員はもとより関係業界の反応も様々でありました。当時、私は、木材工業試験場に在務しておりましたが、特に、鹿児島市内の一部の木材関係業界の猛反対があった事が懐かしく思い出されます。

いろいろな思惑の中で、新生鹿児島県工業技術センターは、名実ともに素晴らしい施設としてスタートしましたが、予想通り、全業界に共通して、単科の試験場の頃と比較して、交通アクセスの悪さなどから利用者が激減しましたが、その後、次第に業界の利用者も数を増し、相談内容等も複雑高度で真剣なものとなってきました。

一方、センターにおける県内関連業界や研究開発への取り組みは、各専門部門はもちろん部門間の連携が密になり総合的に対応できるようになったことであり、この10年間の成果に対する評価は、一つには特許取得等の増加にも見ることができますが、それにも増して、設立以来、センターの職員がそれぞれの責任において懸命に努力し、今日の工業技術センターの基礎造りをしてきた事が大きく評価されるべきものと考えます。

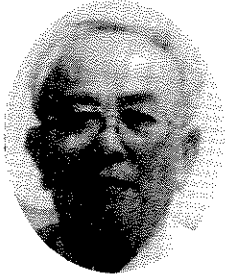
さて、今日の厳しい社会情勢の中で「公設試はどうあるべきか」と問い直されています。

10周年の節目に当たり、公設試としての工業技術センターを見直してみることも大事なことかと考えます。

全国的な傾向として、公設試が研究所的な色彩を強めていることは、時代の趨勢として当然のことです。当工業技術センターも広い視点に立った研究開発に力点を置かざるを得ないと考えますが、その中で地域特性を活かして、他の公設試の追随を許さぬ技術分野の確立も必要かと考えます。又、一方、地場企業固有の優秀な技術や大島紬・川辺仏壇・薩摩焼などに代表される世界に誇れる鹿児島固有の伝統技術等の振興、継承、保存等も公設試に課された重要な業務であると強く認識しなければなりません。

公設試は県民のもの、鹿児島県工業技術センターが研究所と指導所の両機能を持ちながら、次の10年間、本当に外からよく見える「開かれた試験研究機関」として飛躍されることを期待するとともに、職員各位のご健勝とご健闘を祈ります。

田んぼの見える風景



(株)山形屋商品本部

商品試験室長 田 畑 一 郎

いろいろな思い出の残る県工業試験場の建物に後髪を引かれる思いで別れを告げ、隼人町は小田の地に威容を誇る工業技術センターへ、身の回りの書類等を段ボール箱にほうり込み、あたふたと引っ越してきたのは前面に広がる田んぼのあちこちに藁こづみが見られるその年の初冬でありました。

期待と不安の中での引っ越しはありましたが、設立関係者のハード、ソフト両面の細部にわたる御配慮で、私どもにとりましてはすばらしい職場環境に思えたものでした。

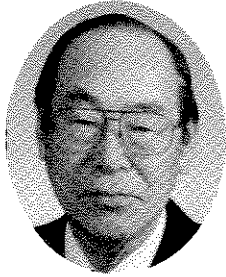
丁度その頃、食品工業部と化学部の共同でシステム技術開発という国補事業に取り組んでおり、その事業の推進と事務的な処理作業に忙殺されていましたが、担当スタッフはもとより新設の企画情報室及び庶務部の方々の協力により、その事業も平成2年3月、無事終期を迎えることができました。これはセンターの総合的な機能を顕著に表す一つであったと今では懐かしく思い出されます。その後毎年のように取り組まれた国補事業では複数部のチームワークの威力を遺憾なく発揮し大きな成果を挙げてきた事は周知の事と思います。そのほか、中小企業からの依頼分析・技術相談等に対しても複数部の専門研究員の対応や設備利用等により適切な御指導ができたという事例をあげれば枚挙にいとまがありません。この事は研究事業に対しても同様、センター機能の一つとして今後益々その有意性の活用を図ってほしいと思います。

センター前面に広がる田んぼに初夏、早苗が植えられ、秋に収穫されるという風景を九度眺めてきました。その間、多くの方々との出会いと別れが思い出されます。異動や先輩の見送りなどありましたが在職中、定年を目前にして亡くなられた故肥後盛英さんとの別れは悲しい思い出の一つです。さらに退職されてから亡くなられた先輩もおられますが、ここに紙面を借りてお世話になったこれらの方々のお冥福を祈りたいと思います。

地域工業技術の文化を創るべく設立された鹿児島県工業技術センターは、多くの実績を残しつつ10周年を迎えられ衷心からお祝い申し上げます。今ここに同センターは創立20周年に向けその一歩を踏み出しました。その文化から生み出される成果という文明が技術面でのかごしまブランドを創造し、それを県下のみならず世界へ発信される事を期待したいと思います。技術文化創造の担い手としてのセンター関係各位の益々の活躍をお祈りいたします。

最後になりましたが隼人町という自然と人情味豊かなこの地で9年4カ月の在職中、皆様と和気あいあいとお付き合いいただいた事に深く感謝し、拙文を終わらせていただきます。

工業技術センターへの期待



(社)鹿児島県工業倶楽部
会長 本坊 慶吉

工業技術センターの前身である工業試験場が設立されたのが大正12年（1923年）とされており、今年で設立以来74年という長い歴史があります。まさに「技術的拠りどころ」として鹿児島県の製造業の発展を支えて来ています。私の工業試験場とのかかわりは昭和30年頃からですが、当時試験場は西鹿児島駅の西側にありました。私にとっては大変便利な場所によく訪れたものです。

昭和60年頃だったと記憶していますが、工業技術センターとして隼人方面への移転の話聞き、これはまた不便な場所に設置するものだと、いささか抵抗を覚えたのは私だけではなかったと思います。昨今のインフラの整備等により、さほどでもないが鹿児島市、南薩方面の皆さんにとっては矢張り不便を感じているのはやむを得ません。

早いもので、工業技術センター設立10周年を迎えることになりました。開所当初、早速見学をさせていただきましたが、建物といい研究設備、機器が充実しており、予想していたよりはるかに立派な設備であると思ったと同時に、当時の少ない研究員でこの設備機器を十分に活用できるだろうか、というのが率直な気持ちでした。それから10年を経過しましたが、所員の研鑽等により多くの人材が育成され研究成果も着実にあがっていることに対し敬意を表したいと存じます。

さて研究開発を大きく分類すると、基礎研究・応用研究・商品化研究の3つに分けられます。基礎研究は勿論重要ですが、公設研究機関特に地域研究機関においては、応用研究・商品化研究に重点をおくことがより必要です。日本は北から南へと長い列島であり気候風土が違い、それだけにそれぞれ異なった地域資源・バイオマス資源、そして伝統的な固有技術をもっています。これらをいかに活用し、技術の高度化・先端化を推進し、産業部門への展開を促進することが公設研究機関の役割であると思います。10周年を機会に工業技術センターの研究がますます充実し、成果があがることを期待しております。

終わりに、先輩研究者の皆さんが次のようなことを言っているのでつけ加えさせていただきます。

研究開発とは

- ・実験に実験を積み重ねることによって新しいモノが見いだされる。
- ・たとえまちがった実験でも何か生まれ造り出されるとそれ自体が新しい発見である。
- ・まちがいでだらけの実験ほど役に立つものはない、どうして、こんなことになったのか、そのものが貴重な体験である。
- ・一応文献で調べたらまず実験してみる。文献どおり行かなかつたら、それは場合によっては新発見である。

地域共同研究センター誕生のきっかけ



鹿児島大学
地域共同研究センター長
工学部教授 松村 博久

鹿児島県工業技術センターが開所10周年を迎えられることに心からお慶び申し上げます。

また、これまでの県内企業における人材育成や技術指導など、地域振興に多大な実績を積み重ねたことに深い敬意を表します。

鹿児島大学地域共同研究センターは平成4年4月に設立され、本年度で満5年を経過しました。工業技術センターのちょうど半分の年齢です。したがって、地域共同研究センターの設立準備の際は、大変なご迷惑をおかけした上に強力なご支援をいただきました。

地域共同研究センター創設には、地域社会の発展に貢献できる開かれた大学として、産官学の連携に関する何らかの実績が必要でした。そこで泥縄式でしたが、平成2年度に鹿児島大学工学部の科学技術相談システムを発足させました。しかし、窓口である技術相談室や専任の職員をもたなかったのです。工学部で準備したのは、科学技術相談案内（相談員名簿を含む）の作成と各学科に1名ずつの相談世話役の連絡員だけでした。

技術相談の申込者は、まず工業技術センターの企画情報室の受け入れ窓口へ申し出て、受け入れ窓口では工学部相談員名簿の専門や相談分野により、相談対応できる教官に電話連絡で調整にあってもらいました。対応予定教官が授業や実験等で不在中は連絡員が世話をしました。相談担当教官が決まると、受け入れ窓口から申込者へ相談担当教官名と相談日が通知されます。これを受けて、相談申込者は担当教官へ直接連絡し、技術相談が実施されるという複雑な仕組みでした。そして、科学技術相談案内の工学部長挨拶の最後に「申込先を直接工学部ではなく、工業技術センターとしました理由の中には、技術相談を通じて工学部と工業技術センターの連携を深めたという気持ちも含まれておりますので、よろしくご理解くださるようお願い致します。」という、他力本願の言葉が加えられていました。今思えば厚顔のいたりですが、工業技術センターの懇親的なご協力により早期の実績ができ、地域共同研究センター実現へ結びついたのであります。あらためて御礼申し上げます。

一方、昭和63年度に鹿児島県工業技術センター研究開発推進会議が設置され、学術部門委員として鹿児島大学工学部から2年間参加しました。平成4年度から現在までは地域共同研究センターから参加していますので、通算8年間も工業技術センターの成長発展を身近に検分する機会が与えられました。地域共同研究センターの進めている産官学の連携についても、この会議の中で便乗することがしばしばありました。両センターの展開の上で良い刺激になったと思います。

最後になりましたが、工業技術センターのこれからの益々のご発展を祈念申し上げます。